工業水準の向上

北川一栄

日本学術会議の委員会の一つに長期研究計画調査委員会というのがある。日本の自立をめざして如何なる基本的研究をすればよいかということで、まづ人口、食糧、エネルギー、防災、基礎科学並びに技術の問題がとり上げられた。その中の技術委員会の一員として日本の技術阻むものは何かということについて討論する機会を得たが、甲論乙駁いづれもいう処は尤もであるが、互いに原因となり結果となつてさてどこから解きほぐしていけばよいか中々にむつかしいことであつた。

筆者も戦後この問題に思いを致し、楽な考え方の一つとして欧米の文明のとり入れ方に一貫性を欠いたためではないか、もしその中に工業或は技術を発達させるのに必要な要素でとり入れられなかつたものがあつた場合には、これを日本内地に居て自ら気づくことはむつかしいに違いない。それで欧米と日本とに現在あるものを比較し、日本のとり入れ方の不充分だつた点を探すことを試みた。結果としては大約次の如くである。

即ち個人としては横做の訓練は充分だが、自分でものを考える力——即ち所謂 Scientific approach の手法に対する訓練が足りないことと、（これは生れつき日本人真似することは上手だという形で裏書きせられてゐる）集団としては綜合する訓練が足りないことである。

綜合することの下手な内容としては、自分自らがやる技術は相当もつているが、人を通じて技術を実施することの下手なことと、課長、部長、社長夫々の視野から広く或は長期的にみる技術が欠けてゐることとが挙げられる。（これは昔技術者は官庁では局長止り、会社では重役にできないといわれたことで裏書きせられているが、実は事務屋についてもあまり差がないのである。）

これらのことは勿論前からも言われているが、問題はその具体的な実施方法で、筆者は大阪大学電気工学科に対する特別講義として数年来この内容を10時間コースで話することにしてゐる。然し現実的には学生諸君はこうした不便さ或は必要性を少しも感じていないから、筆者が内心絶叫する熱弁も空念仏に終る懸念が甚だ多い。それ故せめて卒業後10年或は20年たつてはじめて筆者の弁の必要を感じることもあろうから、その時には是非読み返して欲しいということで、若干小冊子を渡すことにしている。曰く「秋のやつてきた勉強の仕方」曰く「工業水準の向上について」曰く「経験を活かすということ」等々である。本誌の「生産と技術」をつめた生産技術も亦我国の先輩がその導入を怠つた盲点の一つである。

いづれも上記の事柄は我国の資源、習慣等と相まつて所謂我国の工業水準を定めてゐるわけであるが、最も大切なことは、これらの諸原因の内まづ工業水準を高める国民常識をとり上げることである。個人個人を比較すれば何等遜色は認められないのにも不拘、日本人中の外人より有能な人間の考えた事柄でも工業製品となると、欧米人中日本人より劣る輩がつくつたものに及ばない何か枠のようなものがあつて、単に専門学を勉強したり、研究費をだしただけでは抜くことのできないものがある。この水準をどうすれば上げうるだろうかというのが筆者のつねに関心をもつている点である。工業製品も結局は人によつてつくられる以上、この水準をあげる最も大きな要素は人間の考え方であつて、諸原因中長期的大局的に視る考え方をどれだけ国民常識となし得たかということが水準をきめる根本となると思う。

その一端については小冊子「工業水準の向上について」にのべたので、ここでは省略するが、この観点からみると単に技術のみならず政治、経済その他一般生活の中にいろいろと見出される。いつかこの点について纒めてみたいと思つてゐるが、とに角夫々の分野で努力し勉強することは勿論必要ではあるが、水準或はレベルを上げるものは何かということを考え、その具体化と常識化とを恒に並行して実施することが更に必要だということを力説したいのである。　（筆者は工学部講師・住友電工KK専務）

松下電器、大衆型電洗機

同社ではこの程「307」型電気洗濯機を完成市販に入つた。同機は大衆向製品でオーバーフロー式、汚水逆流防止装置がつけられ、洗濯のスピード化が計られてゐる。価格は2万5千円とし大衆向を目標としてゐるので今後の活躍は注目すべきであらう。